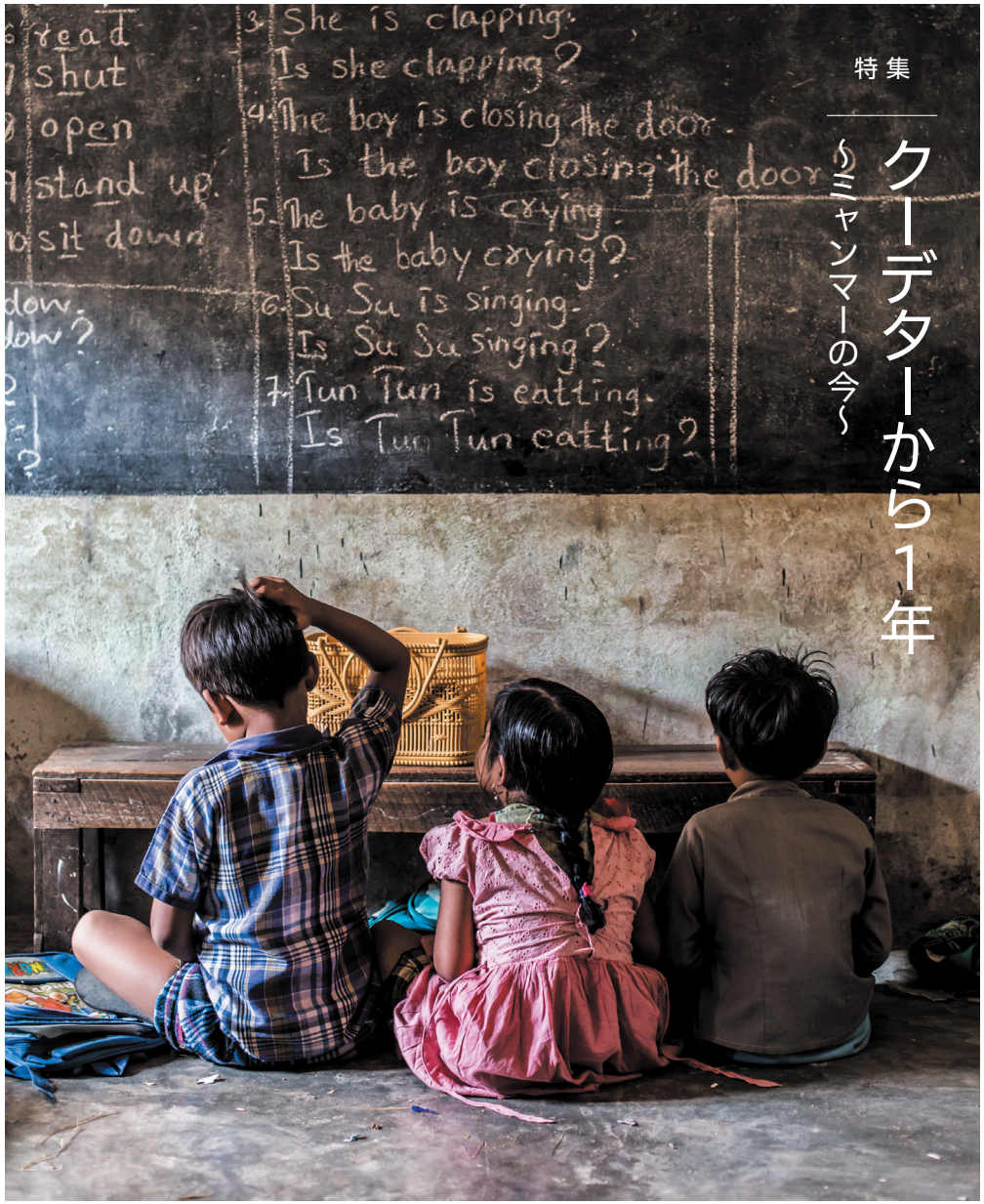
『シャンティ』通巻315号　2022年6月1日発行（6・11月の1日発行）

SHANTI

シャンティ国際ボランティア会

2022.6
Vol.315
シャンティ



特集

クーデターから1年
～ミャンマーの今～

巻末言

道

難民キャンプでの平和の祭典

シャンティ国際ボランティア会　専門アドバイザー
天野教之（天野医院 院長）

2018年にミャンマー（ビルマ）難民事業事務所（BRC）のセイラーさんと東京でお会いする機会があり、難民子ども文化祭に誘われた。難民子ども文化祭は元々、カンボジアのアンコールワットの広場で開催していたと聞いているが、ミャンマー難民キャンプ内においても多民族の文化交流をはかる目的でシャンティが開催してきた。以前BRCを訪問した時に記録ビデオを見せてもらっていた。その実際を見たいと強く思い、急遽（きゅうきょ）スケジュールを調整し訪問した。

難民子ども文化祭では、昼間の部ではすべての子ども、すべてのスタッフが同じTシャツを着て歌・ダンス・ゲームを楽しむ。それぞれの民族対抗のゲームもあり、民族が入り混じったチームのゲームもあり。ゲームをみんな一緒に楽しむ。うまくいってはしゃぐ子、ちょっと悔しそうな子。みんなが声を合わせて、リズムを合わせてダンスする。広場には笑い声が広がる。そこには民族の壁なんてない。

日中のゲームプログラムに参加する子どもたち

民族舞踊を誇らしげに披露する

日が暮れてあたりが暗くなってからは舞台に明かりが灯（とも）され、民族衣装を着た子どもたちが舞台に立ち、その民族の舞踊や歌を披露する。みな誇らしげ。舞台を見つめる子どもたちの瞳も輝く。自分の民族文化に誇りを持ち、他民族の文化を素晴らしいと感じる。

私自身は島国日本に生まれ育ち、あまり日本人としてのアイデンティティーを意識することはなかった。しかし、この難民子ども文化祭に参加して日本人としての文化を強く感じた。そして他の民族もまた独自の素晴らしい文化を持っていることを実感した。また民族の壁を越えて仲良くできることを確信した。きっと子どもたちも同じ体験をし、彼らは将来の世界平和の礎になるだろう。

開会式では「世界平和は一人ひとりがみなシャンティ（平和、寂静）な心を持つところから始まるのですよ」と三部副会長は子どもたちに呼びかけた。子どもたちも、そして私も難民文化祭への参加を通して、シャンティな心に触れることができた。

ヤンゴンにある仏教寺院シュエダゴン・パゴダ
（2015年撮影）

2011年の民政移管以降、民主化へのあゆみが進んでいたミャンマーで、2021年2月、国軍によるクーデターが起きました。自由と民主化を求めて抵抗を続ける市民に、軍は武器を向け、これまでに多くの犠牲者が出ています。

少数民族が多く暮らすタイとの国境付近の村々でも戦闘が続き、空爆から逃れるために人々はジャングルでの避難生活を余儀なくされています。

クーデターから1年。ミャンマーで進んでいた民主化のあゆみや現状、これまでシャンティがミャンマーで取り組んできたこと、そして、このような状況下でも子どもたちの学びを支えたいと活動する職員たちの想いを、お伝えします。

今号の表紙
ミャンマーの寺院学校で勉強する子どもたち（2015年撮影）
@Yoshifumi Kawabata

SHANTI vol.315 CONTENTS

4 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会40年記念対談
京都大学東南アジア地域研究研究所・連携講師 直井里予さん × ミャンマー事務所所長 中原亜紀

6 開催報告 設立40周年イベント 人道危機にどう向き合うか ～40年を迎え、問われるNGOの支援と可能性～
第1部 ミャンマー、アフガニスタンの今
第2部 問われるNGOの支援と可能性

10 特集
クーデターから1年
～ミャンマーの今～

16 世界の絵本を読んでみよう
「体の中の冒険」
ネパール 2021年

18 世界の麺 ラオスの麺「カオソイ」

19 世界の現場からAIRMAIL
▸ラオス事務所 ▸アフガニスタン事務所 ▸ネパール事務所

26 開催報告
カンボジアの今と、これからの教育支援

28 つくり手さんのぬくもり モン族

29 絵本に込められた想い
『きょうりゅうたちのおやすみなさい』

30 ファインダーをのぞいて「平和の象徴レイケイコー村」

31 お知らせ

32 道 難民キャンプでの平和の祭典
シャンティ国際ボランティア会 専門アドバイザー
天野教之（天野医院 院長）

難民キャンプの図書館で育まれた平和と文化

2021年2月にミャンマーで起きたクーデターによって、帰還の足止めを余儀なくされている難民キャンプの人々。そんな中、図書館にできることは何か。ミャンマー事務所 中原所長と直井理事が現状と思いを語ります。

特別連載

公益社団法人シャンティ国際ボランティア会40年記念対談

ミャンマー事務所
所長
中原亜紀

×

京都大学東南アジア地域研究研究所・
連携講師
直井里予（りよ）さん

PROFILE

1998年入職。タイ・バンコク事務所でスラム地域開発事業を担当した後、ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所 所長、東京事務所海外事業課 課長、ミャンマー事務所 所長、シャンティ・ミャンマー国境支援事業事務所 所長を経て、2022年1月から現職。

PROFILE

1998年からアジアプレス・インターナショナルに参加し、北タイのHIV陽性者やカレン難民に関するドキュメンタリー映画を制作。2011年からは京都を拠点に活動中。ドキュメンタリー映画作品に『昨日今日そして明日へ』、共著に『越境する平和学』（法律文化社）などがある。地域研究博士。シャンティ理事。

ミャンマー カレン州のコミュニティリソースセンターにて
（2020年撮影）@Yoshifumi Kawabata

映画撮影時に訪問した難民キャンプにて

難民キャンプの現場と課題

直井：難民キャンプの課題として、今どんなことが挙げられますか？

中原：キャンプでは自分の国について知らずに生まれ育った子どもが全体の3～4割以上を占めています。子どもたちはキャンプの世界しか知らない、自由もない、権利もない。NGOの支援によって絵本の読み聞かせもやったことがない。そこから意義を理解してもらい、責任を持って運営に参加し、図書館が地域の人々から愛される場所になるまでには5、6年かかりました。

直井：図書館というのは、人と人とが出会う空間にもなるわけですよね。本を読むだけでなく雑談をする時間もあって、偶然の出会いもあって、おしゃべりが始まって、そこで関係性が生まれる。そういった空間の形成というのは、とても貴重なものだと思います。

中原：図書館員も子どもたちと触れ合い、関係性を構築していく中で、多くの学びや経験が得られたようです。初期はどこか他人事のような部分もありましたが、次第に自ら進んで青少年向けやお年寄りのための活動など、図書館を通したコミュニティとの連携を考えるようになっていきました。シャンティの図書館活動がここまで継続できたのは、こうした試みによって地域に認識されていったことが大きい気がします。

直井：こちらはやたらとプッシュするのではなく、そっと見守る、そして存在を忘れないようにする。そうすることでお勉強は続けられますが、卒業後は仕事を手にすることもできない状況です。またキャンプでの生活が長く続けば続くほど、民族としての誇りもアイデンティティーも失われてしまいます。

直井：昨年はクーデターも起きました。

中原：今回のクーデターで、これまで粛々と続いていた帰還も完全に閉ざされてしまいました。難民キャンプでの生活はもうしばらく続かざるを得ないと思います。そうした時に私たちに何ができるかというと、やはり図書館活動を継続していくということですよね。キャンプの人たちが楽しみや夢、喜びを見いだせる希望の空間としての図書館は、絶対に残したいと思っています。

図書館で育まれた平和と文化

中原：難民キャンプでの図書館活動は2000年にスタートしましたが、軌道に乗るまでにはさまざまな問題がありました。図書館運営はシャンティではなく、現地の皆さんが行う形にしたかったのですが、そもそも絵本を読んだことも互い前に進める、平和を作っていける。

中原：本当にそうですね。平和を作っていくのは現地の人たちであって、第三者が「これが平和です」と押し付けるのはおこがましい。相手が望む本当の平和をどう作っていくか、そこを一緒に考えるのが大事なのだと思います。

求められているのはNGOの機動力

直井：難民支援に関して言えば、やはり政府の方針がコロコロ変わりますよね。それに対応できるのは、やはりシャンティのようなNGOしかないんじゃないかと思うんです。臨機応変に対応できるNGOの機動力。そうしたところが今非常に求められている気がします。

中原：小規模であっても継続していけるというのもNGOの強みですよね。フレキシブルに、柔軟性を持って関われる。だから続けられる限り続けて、難民の人たちが必要とする支援を最後までしっかり続けていきたい。それがシャンティの使命だと思っています。

設立40周年イベント

人道危機にどう向き合うか
～40年を迎え、問われるNGOの支援と可能性～

第１部

人道危機にどう向き合うか
~ミャンマー、アフガニスタンの今~

2021年12月、設立40周年を記念し、オンラインイベント「人道危機にどう向き合うか～40年を迎え、問われるNGOの支援と可能性～」を開催しました。第1部では「人道危機にどう向き合うか～ミャンマー、アフガニスタンの今～」をテーマに、難しい判断をしながら進んだ2021年をお伝えします。

アフガニスタン事務所
職員代表

アフガニスタン事務所
職員代表

ヤンゴン事務所
コーディネーター
ヤンナイ

事務局長
兼 アフガニスタン事務所
所長
山本英里

PROFILE
2002年より、アフガニスタンに7年間駐在。その後、パキスタン、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ、カンボジア、ネパールでの教育支援、緊急救援に携わる。2019年より現職。

×

デジタル機動報道 部長
兼 ジャーナリスト学校
デジタル推進担当 部長
藤谷健さん

PROFILE
1987年に朝日新聞社に入社。国内支局を経験した後、国際報道部に所属し、イタリア・ローマ支局、インドネシアのジャカルタ支局、バンコクのアジア総局では総局長を務める。

ミャンマーとアフガニスタンの今

ヤンナイ（ミャンマー）：現在のミャンマーは、社会の混乱により収入が途絶えてしまった貧しい人々も多く、生活への影響は深刻です。

軍事政権下でも活動を続けるべきか、現地職員や所長、東京事務所と何度も話し合いました。残念ながらスタッフの何人かはシャンティを去りましたが、残されたスタッフは「こんな時だからこそ、私たちにできることに全力を尽くさなければならない」と話しています。

アフガニスタン事務所　男性職員：治安は非常に悪化していますが、幸いなことに、現状を変える大きなチャンスがまだあります。なぜなら、タリバンは外交再開を世界に呼び掛けており、もし世界が人道支援を続けるのであれば、いつの日かタリバンが人間の尊厳を尊重し、国を発展させると信じているからです。

現在の危機的な状況の中で、シャンティの活動を通じて、最も弱い立場にあるアフガニスタンの人々に開発プロジェクトや人道支援を提供したいと考えています。

アフガニスタン事務所　女性職員：私はたくさんの女性たちの状況を見てきました。アフガニスタン社会で地位を築き、経済的に家族を支えている人もいました。でも今はできず、将来の希望もなく、その状況をとても辛く思います。私はこの国をより良くするために、子どもや女性の教育支援を続けたいと思います。

立て続いた活動地での政変。その時、東京事務所では

藤谷：厳しい状況にある一方、大きなチャンスもあるという言葉もありました。今回のように活動地で緊急事態が起きた場合、東京事務所ではさまざまな判断を下す必要があると思いますが、どのようなことを進めたのかを教えてください。

山本：まず職員の安否確認と、安全の確保を最優先しました。並行して東京事務所でタスクチームを結成して対応にあたりました。

藤谷：非常に緊迫した状況で、どの情報が正しいのか分からず、そもそも情報が入ってこないといったような中で判断が迫られるわけですよね。どのような葛藤や感情をお持ちでしたか。

山本：何を優先すべきか答えが見えないうちに、次の問題が降りかかってくるような日々でした。命の選別を迫られているかのような状況に、無力感にさいなまれる時もありました。

そんな時に、命の危険さえある職員に逆に励まされたことで、絶対に諦めない、やれることは何でもやろうと決めました。

藤谷：緊急下における東京事務所の役割はどのようなことなのでしょうか。

山本：シャンティの活動は、現場と東京事務所の両輪で動いています。連携しながら事業全体の把握、安全確保の指示、役員への状況共有や決議などを踏まえて進めます。東京事務所だけで判断するのではなく、海外事務所と協議を重ねて、その時点における最善策を見つけ出すことを心掛けています。

事業継続における制約を受け入れながら

藤谷：海外事務所には日本人の職員もいますよね。緊急時だからこそ、活動地に日本人職員が居続ける意味はどのような点があるのでしょうか。

山本：現地職員は当事者でもあるので、そこに客観的な立場で判断ができる日本人職員がいることで、冷静に協議しながら進めることができ、対応力が高まると考えています。ただ、日本人がいることでリスクが高まる場合もあり、常に状況を見ながら残留あるいは退避の判断をしています。

藤谷：現地の住民目線で活動することは、シャンティが最も大切にしていることの一つだと思いますが、危機下やコロナ禍で現地に入ることができない難しさもあったと思います。

山本：日本人職員の派遣については各地で難しい状況が続いています。例えば、アフガニスタンでは日本人の渡航も制限されており、これまでも第三国で定期的に会議を行うなど工夫をしていました。

一方で、一定のリスクを負いながら支援を継続すべき状況もあります。そういった時には、支援の必要性とタイミングなどを見ながら判断する必要があり、難しいですね。

藤谷：今後、予測できない人道危機にNGOとしてどのように備えようとお考えですか。

山本：今回の危機下を経て、改めて重要だと思ったのは、リスクの許容範囲と、支援継続に対する方針を組織として明確に持つこと。そして、それを実現するための行動計画などを準備しようと考えています。職員のメンタルヘルスへの対応も重要です。

常に想定外のことが起こる可能性を念頭において、柔軟に対応できる組織であることも大変重要だと感じています。

イベントの様子は全てご視聴いただけます

イベントの様子は、YouTubeにて全編ご視聴いただけます。
第1部と第2部の、ここではご紹介しきれなかった部分のほか、これまでのシャンティのあゆみについてのご紹介や、事務局長によるこれからに向けた決意表明などもご覧いただけます。

ご視聴はこちらから

設立40周年イベント

人道危機にどう向き合うか
～40年を迎え、問われるNGOの支援と可能性～

第２部

問われるNGOの支援と可能性

第2部では「問われるNGOの支援と可能性」をテーマに海外事務所とつなぎ、現在の様子を踏まえながら、NGOの支援と可能性について考えました。コロナ禍や危機下においても、常に最前線で活動に取り組む職員の声をお届けします。（内容は2021年12月時点）

登壇者プロフィール

テーマ①

ミャンマー事務所
プロジェクトスタッフ
カイン

ミャンマー（ビルマ）難民
事業事務所 副所長
セイラー

テーマ②

カンボジア事務所 所長
加瀬貴

カンボジア事務所
学校建設事業
プロジェクトスタッフ
サイハー

ラオス事務所 所長
玉利清隆

ラオス事務所
プロジェクト調整員
オイ

ネパール事務所 所長
三宅隆史

ネパール事務所
コーディネーター
ビノッド

ファシリテーター

東京事務所
事業サポート課　課長
菊池礼乃

テーマ①「長期化する危機下における図書館活動の可能性」

カイン職員（ミャンマー カレン州パアン事務所）：クーデター後、子どもたちは安全な学習の場を得られず、学習を継続する機会も失われています。子どもたちとその未来のために、このギャップを埋めるのが図書館の支援だと思います。

セイラー職員（ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ事業事務所）：難民キャンプの図書館は、複雑な背景を持つ難民の人たちにとって欠かせない居場所となっています。子どもたちにとっては安心して過ごせる場所、大人にとっても不安な日々の中で安らげる場所になっています。

また、限られた情報しか入手できない難民キャンプで、外の世界の情報を得られることや、図書館で育まれる他者との信頼関係は、彼らの人生の選択においても影響を与えています。

テーマ②「コロナ禍2年目の活動現場で、NGOだからこそできたこと」

サイハー職員（カンボジア）：11月から教育省は各教室の収容人数を20人までとして授業を再開し、人数が多い場合はオンライン学習や自習活動を継続することになっています。しかし、貧しい家庭では農作業などで、自習自体の継続もできない子どもたちもいました。

コミュニティ学習センターの利用者も大幅に減少しましたが、現在は感染対策を講じ、以前のように利用できることを、利用者に積極的に働きかけています。

コロナ禍の活動の一環として、感染対策グッズを緊急的に学校に配布しています。また、カンボジア事務所の出版物や読み聞かせビデオを閲覧できる電子図書館サイトを開設しました。

加瀬（カンボジア）：日ごろから密なコミュニケーションを重ね、ステークホルダーとの強い協力関係があるからこそ、感染拡大期においても事業を一定程度進めることができました。日々の積み重ねが、非常時に大きな力になることを実感しました。

オイ職員（ラオス）：ラオスは4月と10月に国全体のロックダウンを発表しました。学校は定期的に開かれておらず、一部の学校はオンラインで授業を行っていますが、インターネットにアクセスできない地方の子どもたちは勉強を続けることができていません。

シャンティの活動も、計画を延期せざるをえない状況です。一方、学校における移動図書館活動の一環で、児童に手洗いの重要性を伝えています。

玉利（ラオス）：コロナ対策の衛生教育など、規模は小さくとも、追加の活動を柔軟かつ迅速に実施することができました。県を跨ぐ移動が制限されていた期間もありましたが、農村部に近い場所に事務所があるため、比較的現場で活動することができました。

ビノッド職員（ネパール）：ネパール事務所では、3つのコロナ禍緊急支援事業を行いました。1つ目はコロナ重症者の集中治療のための病院への医療機器の提供。2つ目は地域学習カリキュラム事業を実施しているラクシラン村の中央病院に、ワクチンを保管する冷凍庫の支援。そして3つ目は、シャンティが支援する4つのコミュニティ図書館を通じて、コロナ禍で仕事を失った生活困窮者、困難に直面している高齢者1500人への食料や感染予防物資の提供です。

三宅（ネパール）：行政が把握していない部分を補う形での支援を進めました。へき地の村でも、日ごろから関係を構築していたからこその成果だと思います。

現地の報告から見えてきたこと

新型コロナウイルスの感染拡大や、政変という未曽有の事態に対峙するにあたり、シャンティが長年構築してきた信頼関係が非常に有効であると改めて感じました。

一方で、ニーズが変わり続ける中で、常に情報を収集し、計画をしっかり立てながらも、柔軟に対応する実践力がより必要であることが見えてきました。目標の達成に向けて、変わらない理念と、時代とともに変わっていく実践力が、未来を切り拓いていく鍵となるのではないでしょうか。

（事業サポート課 課長　菊池礼乃）

空港敷地内に入る前のチェックポイント

ミャンマーの今

半世紀以上続いた軍事政権下のミャンマーでしたが、2011年3月の民政移管によりテイン・セイン政権が誕生、民主化に向けて大きな舵が取られました。民政移管後、海外から多くの投資が入ったことから建設ラッシュが進み、大型商業施設や新たなホテルなどが次々とオープンし、急激な経済成長を続けてきました。携帯電話の加入率も2013年以降上昇し、2018年には100%を上回りました。軍事政権下での制限もありましたが、規制緩和や外資系通信会社の参入により価格が大幅値下げされたことなどが背景にあります。ヤンゴンでは韓国文化の影響もあり、若者のファッションにも変化が見られました。一方で、地方との格差が拡大し、経済成長の不均等が課題として生じていたように思います。2016年の総選挙によりアウンサンスーチー氏率いる国民民主連盟（NLD）が新政権として誕生し、さらなる民主化を推し進めることになりました。教育分野でも大きな改革に着手し、国家教育戦略がまとめられ、新カリキュラムの導入や新教科書の作成など大規模プロジェクトも始まりました。児童を中心とした学習環境へと転換したのです。

こうした民主化へのあゆみの中、2021年2月1日に軍事クーデターが起きました。2020年12月に実施された総選挙でNLDが2度目の圧勝を遂げましたが、国軍は選挙結果に不正があったと主張してクーデターを正当化しました。国軍は負けることを想定していなかったと言います。

この国の「父」である自分たちの意向や利権は保持されなければならない、さらには国家を正しい方向に導くのは軍であるという考え方が潜在的に強くありました。NLD政権は国軍に議会議席の4分の1を与える現行憲法の改正に取り組みながら、こうしたことをもくろんだり国軍の利権が軽視されてはならないと主張していました。自分たちの地位や利権が脅かされる状況に危機感を強く感じはじめていたのではないかと思います。

ミャンマー事務所 所長（中原亜紀）

民主化以降の ミャンマーのあゆみ

2011年

民政移管

テイン・セイン大統領が就任し、長らく続いた軍事政権から民政に移行しました。テイン・セイン大統領と民主化運動の指導者アウンサンスーチー氏との会談、政治犯の解放など、新政府主導による民主化が進められました。また、経済面でもアジアのラストフロンティアとして注目が集まり、多くの外国投資が集まり始めました。

2015年

総選挙

民政復帰後初の総選挙でアウンサンスーチー氏率いる国民民主連盟（NLD）が大勝しました。2016年にはNLD政権が発足し、アウンサンスーチー氏は、国家最高顧問、外務大臣および大統領府大臣に就任。民族和解、民主主義の定着、経済成長が重要施策として掲げられました。

2016年

帰還プログラム開始

2011年から政府と少数民族武装勢力との和平合意が進められていました。60年以上にわたって紛争が続いてきたカレン民族同盟（KNU）も2012年に停戦合意に至りました。2016年からはタイ、ミャンマー両政府合意の下、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）が仲介し、ミャンマーへの難民帰還が動き始めました。本プログラムを利用し2019年までに1,039人の人々がミャンマーへ帰還しました。

2020年

総選挙

新型コロナウイルスの感染が拡大する中、11月に行われた総選挙にて与党のNLDは前回の総選挙を上回る議席を獲得し、再び大勝を収めました。国軍系の連邦団結発展党（USDP）が大敗を喫する一方で、国軍は2008年憲法により全議席の4分の1に相当する議席の指名枠を保有しています。

2021年2月

クーデター

2月1日、国軍によるクーデターが起きました。国軍は非常事態宣言を発令し、与党幹部らを次々と拘束しました。市民はクーデターへ抗議し、市民的不服従運動（CDM）や抗議デモを続けています。また、軍の統治に代わる独自の政府として国民統一政府（NUG）が発足しました。これらに対し国軍は武力で弾圧し、1,500人を超える人々が犠牲になり、1万人を超える人々が拘束されています。

2021年12月

タイ・ミャンマー国境での空爆

クーデター以降、少数民族が多く住む国境付近では多くの少数民族武装勢力と国軍との戦闘が激しさを増しています。シャンティが事務所を構えるカレン州では、12月中旬に銃撃戦が始まり、国軍による空爆が続いています。全国で40万人を超える人々が国内避難民となり、食料や医療、住居、衣料など切迫した人道支援のニーズが高まっています。

積み重ねた実績

建設した学校

23校

老朽化した寺院学校や公立学校の校舎を、これまで23校建設してきました。校舎の建設だけでなく、図書コーナーの設置や、校舎を長く利用できるように校舎維持研修も行っています。1年以上にわたり休校していましたが、2021年11月より再開され、子どもたちが学校に戻り始めています。
子どもたちや教員からは、新校舎のおかげで天候に左右されずに静かな環境で授業が受けられることへの喜びの声が聞かれています。

開催した研修

38回/789人

学校図書館に関するマニュアルを整備し、学校図書館の意義や必要な要素、運営方法についての研修を行いました。教育省や学校長、教員、公共図書館職員等のべ789人が参加しました。また、シャンティから研修を行うだけでなく、参加者同士で学び合うため、定期的な会議を開催し、参加者それぞれの課題や成果を共有し、活動の改善や質の向上につながりました。新型コロナウイルスの感染が拡大する中では、オンラインにて研修活動を継続しました。

『皇帝にもらった花のたね』、デミ 作・絵、武本佳奈絵 訳、徳間書店

支援した図書館

35館

小学校に学校図書館を設置したり、公共図書館との協力により小学校への移動図書館活動を実施してきました。本を提供するだけでなく、教員や図書館員による読み聞かせなど、図書を利用した活動も行ってきました。たくさんのイラストが入った本を読むのは初めてという子どもも多く、どの学校でも子どもたちが夢中で本を読む姿が見られました。教員からは子どもたちが文字だけでなく、礼儀や思いやりを本から学んでいるという声が寄せられました。

出版した絵本

31タイトル/169,930冊

ミャンマーでは子ども向けの図書や絵本が少なく、絵本作家の数も限られています。ミャンマーの人たちが自らの手で、自らの文化を基にした児童図書を制作するために、現地の作家、画家、編集者らと児童図書出版委員会を立ち上げ、これまでに31タイトルの絵本、児童図書、紙芝居を出版しました。また、現地の絵本作家を育成するため、日本の絵本作家による児童図書出版研修も行ってきました。出版した図書は全国の公共図書館や事業対象の学校へ無償で配布しています。

シャンティのあゆみ

2014年3月

事務所立ち上げ

ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所を開設した2000年当時からミャンマーの課題を目の当たりにし、活動を模索してきました。ようやく2014年3月に3名の現地職員と共にピー事務所を開設しました。カウンターパートからは「アジア的な価値に基づいた支援、他国での図書館活動の経験の共有」に期待する声が寄せられました。

2014年

4つの事業を開始

早速4つの事業を開始しました。第1回絵本コンクールを開催し、「家族」をテーマに絵本を募集しました。そのうち3タイトルを選定し出版しました。また、公共図書館に児童スペースを設置したり、図書館員向けに研修を行い、子どもたちが公共図書館で自由に絵本を読んだり、読み聞かせに参加したりできるように環境を整えました。
さらに、学校に通えない子どもたちのために夜間学校を開いたり、貧困層の子どもたちを受け入れる寺院学校や孤児院の建設も開始しました。

「教育現場の変化」コラム

国を挙げての教育改革

2011年より大規模な教育改革が行われ、NLD政権でさらにその動きが加速しました。教育年数の増加、カリキュラムの刷新、それに伴う新教科書の開発、教員養成など多岐にわたる改革が進められてきました。特に新カリキュラムでは、批判的思考やコミュニケーションといった21世紀型スキルの獲得が強調されました。これまで暗記や暗唱が中心だった教育が、子どもたちの興味や関心に沿って子どもたちが能動的に学べる児童中心型教育へ変わろうとしていました。

コロナとクーデターによる教育現場の変化

新型コロナウイルスの感染拡大や政情不安により1年以上にわたり学校が閉鎖されました。休校中、オンラインを活用した自宅学習が推奨されましたが、インターネット環境が十分に整わない家庭の子どもたちはアクセスできませんでした。また、クーデター以降は軍政下の教育省が公開する教育教材への抵抗を感じる人々も多く、積極的な利用は見られませんでした。学校が再開された後も、軍政下の公立学校へ通うことへの抵抗を感じる保護者や子どもたちがいます。

2015年2月

移動図書館活動を開始

公共図書館に通えない子どもたち向けに移動図書館活動を開始しました。移動図書館バイクに絵本を積み、子どもたちのもとへ向かいます。読み聞かせやゲーム、歌、お絵描きなどの活動を行った後、子どもたちが思い思いに絵本を楽しみました。

2019年7月

ミャンマー国境での新しい一歩

難民の帰還に向けた復興・再定住支援を行うため、ミャンマー国境支援事業事務所を開設しました。帰還民と以前から住んでいる地元住民が集い、情報交換や交流をする場所としてコミュニティリソースセンターの建設を開始しました。図書室やパソコン室、多目的ホールなどもあり、大人から子どもまで多くの人々が利用できる場所となっています。

まとめ

ミャンマーの子どもたちの学びの場を途絶えさせないために

クーデターから1年がたった今、商店やレストランなども通常営業を行い、人々や車も行き交っており、本当にクーデターは起きたのか、今もその渦中にあるのか、疑ってしまいます。

しかし、デモを続けている人たち、拘束と拷問、軍と市民の戦闘、軍への密告者と市民との殺し合い、村々を狙った空爆や焼き打ち、国内避難民の大量発生、ジャングルなど過酷な環境下での避難生活、といったニュースが日々SNSで伝えられています。

街中のあちこちにバリケードや警備ボックスが置かれ、銃を持った軍や警察による監視も続いています。ただ置いてあるだけであっても銃口は歩く人々に向けられており、私も何度か通り過ぎる場面がありましたが、さすがに緊張しました。こうした暮らしの中で人々はどれほどの恐怖と不安を抱え生きているのか、これからも耐え続けなければならないと思うと胸が痛みます。

2019年、タイ・ミャンマー国境のカレン州でタイからの帰還難民支援を開始しました。事務所開設や職員雇用など準備には苦労しましたが、ミャンマー側で難民キャンプから帰還した人たちへの支援ができる、シャンティとして長年の願いがかなう喜びがありました。民族のあつれきや対立を超えて共存できるミャンマーを作り上げていってほしい、そこに少しでも貢献できる活動をシャンティとして関わっていける、そんな希望を見いだしていました。

2014年から開始したミャンマーでの事業もようやく軌道に乗り、まいてきた図書館活動の種が芽を出し、ミャンマーの子どもたちのために図書館の木をしっかりと育てていこうと関係者と手を取りあっていました。世界中で新型コロナウイルスがまん延し、活動の遅延や一部中止などさまざまな影響を受けました。いつかこの事態は終わる、今は我慢の時だと思っていましたが、軍事クーデターにより一瞬目の前が真っ暗になりました。ミャンマーで活動ができなくなるのか、これまでの蓄積は無くなってしまうのか、共に歩んできたスタッフたちはどうなるのか、いろいろなことが頭をよぎりました。

2021年2月1日以降に失われた命は1500人以上にものぼり、今なお1万2000人が拘束され40万人以上が避難民となっています。（政治犯支援協会データより）平和的な抗議デモを続けてきた市民に軍は銃弾やロケット砲を撃ち込み始め、さらには抗議デモ参加者だけではなく、人命のために行動を起こした医療従事者や小さな子どもたちまでもが標的にされました。2022年1月末現在、少なくとも114人の子どもが犠牲になったと報告されています。（国連報道官発表）

クーデター以降、私たちに突き付けられたのは軍事政権下での活動を継続するか否かの判断でした。組織として継続の意志があったことは間違いありません。しかし支援の必要性があってもミャンマー人職員無しでは不可能です。活動の継続は軍事政権との関わりを持つことを意味し、職員らがノーと言えばシャンティとしては断念するしかありません。

今後について何度も話し合い、残念ながら離れた職員もいましたが、活動を継続していくという結論に至りました。子どもたちの学びの場を途絶えさせてはいけない、特にシャンティの図書館活動はミャンマーには不可欠だと職員たちは強い意志を見せてくれました。シャンティマインドと言っていいのか分かりませんが、彼らから力をもらいました。

正直、出口は見えず、不安が募ります。しかし子どもたちの未来に待ったはない、今できることを継続していくことがミャンマーの未来につながると信じています。

中原亜紀
ミャンマー事務所　所長
1998年入職。タイ・バンコク事務所でスラム地域開発事業を担当した後、ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所 所長、東京事務所海外事業課 課長、ミャンマー事務所 所長、シャンティ・ミャンマー国境支援事業事務所 所長を経て、2022年1月から現職。

職員が今思うこと

悲しみと不公正をもたらしている軍事クーデター

あの日から日常生活は変化しました。毎日恐怖におびえながら生活をしています。町の中にはいくつもの検問所があり、そこではスマートフォンやSNSをチェックされ軍事政権に反対する投稿がないかを確認されます。検問所でスマートフォンのチェックを拒否した人が殺害されたケースも多くあります。軍事クーデターは最も深刻な人権侵害です。市民を守る法律はもはやありません。

2016年の政権交代以降5年間は、私たちはさまざまな夢を抱くことができました。この国がさらに発展していくのを楽しみにしていました。しかし、軍事クーデターが皆の夢を奪い、あらゆる分野でミャンマーを破綻に追い込んでいます。

1年が経過した今も、状況は悪化の一途をたどっています。国の至る所で毎日のように爆発や戦闘が繰り返されています。経済活動は停滞し、日用品の価格が2倍に高騰するなど深刻な経済危機に陥っています。

軍事クーデターにより、多くのNGOが撤退しましたが、支援へのニーズは高まる一方です。どうか皆さまからの継続したご支援をいただけますと幸いです。私たちはこれまでも、そしてこれからも皆さまへの感謝を忘れません。

ティン・ミャ
ミャンマー事務所
アシスタント・プロジェクト・コーディネーター
幼少期から本や物語に慣れ親しみ、読書の楽しさや重要性を実感。大学卒業後、2016年シャンティ入職。

人の命より権力が大切に扱われている

軍事クーデターへの恐怖で日常は一変しました。ミャンマーの至る所で破壊行為が繰り返されており、地域の安全を守るために私は近所の人と一緒に地区の夜間警備を行っています。友人や家族との会話ですら、今の状況に関する話題に対しては非常に慎重にならざるを得ないのです。1年経過しましたが状況は不安定なままです。軍事政権は再三にわたり人々を欺（あざむ）いてきました。私たちは皆、自分たちの国で囚人になっているようなものです。

現在は政情不安により図書館は閉館しています。子どもたちが教育の機会を失ったことは非常に大きな損失です。絵本が人々の涙と埃にまみれて泣いているような気がしてなりません。

日本の皆さま、私たちの国のように発展途上の国では教育が最も切迫して必要とされています。教育への支援なしでは、この国の将来を考えることはできません。今ミャンマーでは子どもたちの命が存続の瀬戸際にあります。この点だけは忘れないでいただきたいと思います。子どもたちは地球に住む全ての人々の希望です。私たちが命を全うする前に、子どもたちの面倒を見るのは私たちの責任です。現在、ミャンマーでは暴力が勝っているように見えますが、長期的な視点で見れば、非暴力が勝利すると信じています。

トータ
ミャンマー事務所
カウンターパート渉外担当
2014年入職。8年間小学校教員として勤務した後、NHKヤンゴン支局にてテレビプロデューサー、ツアーガイドとして勤務。

今こそ地域に根付いた活動が必要

新型コロナウイルスの感染が拡大していますが、軍は対処しきれていません。医療施設は十分に機能せず、医療従事者も拘束されているため治療を行う人が不足しています。また、新型コロナウイルスの感染や治安への懸念から子どもたちを学校へ行かせようとしません。

このような状況下でも、寺院学校のように子どもたちが不安を感じずに規則正しく普段通り学校に通い友人らと集まれる場所で、シャンティは活動できると思います。そうすることで、政情不安によって学校に通えていない地域の子どもたちも教育サービスを受けられるようになると信じています。

ソトゥ
ミャンマー事務所
プロジェクトスタッフ
複数のNGOでの勤務を経て、カレン州のコミュニティリソースセンターの事業担当として2020年シャンティ入職。

世界の絵本を読んでみよう 37

ネパール　2021年
ネパール栄養教育紙芝居
シャンティ出版

体の中の冒険

1

「う〜ん、お腹が痛いよ」
ドルマはとても苦しそうです。
おばあちゃんはみんなに、ドルマを治すのを手伝っておくれと言い、おまじないをかけて3人をドルマの体の中に連れていきました。

2

ドルマの口の中はバイ菌がいっぱい。食べる前の手洗いや何日も歯みがきをしていなかったせいです。みんなでバイ菌を口から追い出しました。

3

次に3人はお腹の中へ。ここには食べ物や砂糖のかたまりが溶けずにたくさん残っていました。ドルマは虫歯のせいで食べ物をしっかりかめず、おまけに油っこいものが大好きでした。

4

小腸の中には悪い虫がいて食べ物の栄養を横取りしています。
「ドルマがちゃんと料理されていない食べ物を食べていたのを見たわ！」
みんなは力を合わせて虫たちをやっつけました。

5

虫たちがいなくなった後、栄養が小腸で吸収されるようになり、体中につながっている細い管を通って体の隅々まで広がっていきました。3人は体の外に出てきました。

6

ドルマはすっかり元気になりました。そして、これからは手洗いや歯みがきをきちんとすること、食べ方と食べる物に気をつけることを約束しました。

紙芝居を読み終わった後、子どもたちに以下の質問をして、栄養や健全な食習慣についての理解を深められるようになっています。

- なぜドルマは病気になったの？
- 健康になるには何をしないといけないかな？
- どんなふうにごはんを食べたら、病気にならないかな？　など

世界の麺

ラオスの麺

［カオソイ］

ເຂົ້າຊອຍ

ラオス・ルアンパバーン事務所
ポンサワン・ウアンサワットさん（通称タイさん）
複式学級運営事業のプロジェクトスタッフとして働いています。

大豆の香りが豚骨スープと溶け合う伝統的なひとさら

ラオスの北部で食べられているカオソイは、坦々麺のようなもので、発酵させた大豆の香りが広がりとてもおいしくておすすめです。作り方は、中華鍋に植物油を中火で熱し、にんにく、発酵大豆を加え、香りが立つまで約2分炒めます。そこに、豚ミンチ、刻んだトマトを加えて炒めたら、具材のできあがり。スープは、まず生姜と玉ねぎは皮に焦げ目がつくまで焼きます。セロリ、コリアンダーの根を加え、お湯が沸いたら豚骨を加え、2時間以上コトコト煮込み、味をしみ込ませたら完成です。

私はよく昼食に食べています。ルアンパバーン市のセン寺の向かいにある、ワットセン レストランのカオソイは有名で、一杯約200円ほどで食べることができます。

カオソイを食べるポンサワン・ウアンサワットさん。ラオスのカオソイは北部地域の伝統的な食事の一つです。大豆の香りがとても食欲をそそります。

世界の現場から

AIRMAIL

To 日本の皆さん　From 活動の現場

このページでは、アジアの各国で活動するシャンティの様子や職員を紹介します。

From Laos

ラオス事務所

ラオス北部地域では、多くの小学校で「複式学級」が導入されていますが、授業を効果的に行うための教員の知識・技術が不足しています。その改善に向けて、指導法を記した教材づくりや教員研修を実施しています。

From Afghanistan

アフガニスタン事務所

2021年8月の政変以降、アフガニスタンでは難民の増加や食料不足、経済状況の悪化が続いています。その中で、シャンティは子ども図書館の運営を再開し、子どもたちが自由に安心して過ごせる場所を守っています。

From Nepal

ネパール事務所

2016年の事務所開設後、復興支援事業として学校建設や防災教育に取り組んできました。復興が進む中、次のフェーズとしてネパールで現在実施している、教育の質向上のための活動についてご紹介します。

From
Laos
ラオス事務所

教員の知識・技術の改善に向け、教材づくりや教員研修を実施するラオス事務所。日々奮闘する現地職員が、現在の状況をお届けします。

複式授業の指導法改善で子どもたちへ質の高い教育を

山岳地域の多いラオスでは、村と村が離れており、小規模な学校が多く点在しています。特にへき地では、在籍する教員が数名しかいない学校がほとんどで、複数の学年を一緒に指導する「複式」スタイルの授業が主流です。しかし、複式学級での指導は難しく、多くの教員が困難を抱えています。

ラオス事務所では、2014年より複式学級の指導法改善を目的に、教育スポーツ省、県や郡の教育スポーツ局、北部教員養成校と協力し、現場の教員の声を取り入れながら、指導法改善のための研修実施やハンドブックの作成などの活動をしてきました。

変化を実感しながらも、国内の教育格差の改善を目指して

「複式学級運営改善事業」*に携わる中で、カウンターパートが知識や技能を習得したり、対象地の状況が改善されたり、多くの変化が見られています。このような変化を見られることをうれしく思うと同時に、子どもたちにより良い教育が届けられることを楽しみにしています。

*この事業は国際協力機構（JICA）の草の根技術協力で実施しています。

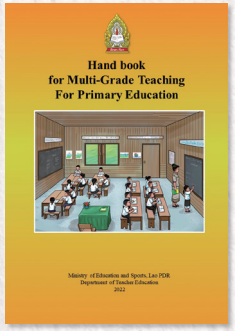
Hot Topics

❶ 複式学級運営改善のための計画策定会議の開催

2022年1月、教員養成校3校に対して、複式学級指導に関する行動計画策定会議を実施。北部3校の教員養成校のみならず、全国の教員養成校にて効果的な複式学級運営を推進するための計画を2日間かけて策定しました。

❷ ルアンパバーン県教員養成校で複式学級運営研修を実施

2022年2月、4日間にわたり、教員養成校において講師の複式学級運営の指導力向上のための研修を実施。模擬授業終了後には、参加者間でフィードバックを行うなど意見交換を行い、充実した研修となりました。



❸ 複式学級運営の手引きが教育スポーツ省により承認

2018年末から作成してきた「複式学級運営の手引き」が完成。公式な教材として2022年1月に教育スポーツ省からの承認を得ました。教員や視察員の意見を反映し、学校レベルに沿った実践的なハンドブックになるよう改訂を重ねてきました。

ラオス事務所
アシスタント・コーディネーター
シーライ・カムランパン

PROFILE
教員養成校に通いながら2013年～2017年までルアンパバーン市内のさまざまなホテルで勤務。NGOで働く友人の仕事内容に興味を持ち、シャンティに2017年3月入職。複式学級運営改善の事業に携わる。

From Afghanistan

アフガニスタン事務所

難民の増加や食料不足、経済状況の悪化が続くアフガニスタンで、子どもたちが自由に安心して過ごせる場所を守る現地職員の声を届けます。

政変以降の状況は悪化 子どもたちに教育を届けたい

アフガニスタン事務所では、ナンガハル州のジャララバード市にある大規模女学校（小・中・高校）にモデル学校図書館を建設しました。同時に、事業対象校での移動図書館活動や新たに作成した学校図書館ガイドラインの最終化、学校図書館や子ども図書館の運営と活動に関するトレーナー研修実施の準備、教員研修などを行ってきました。

しかし、政変以降、人々の経済状況や教育環境は悪化の一途をたどっています。7年生以降の女子生徒は学校で学ぶことがかなわず、また、女性教員たちが男子生徒に教えることを禁止されたため、男子を教える教師の数が不足。そのため男子生徒は定期的に登校できない状況になりました。小学校6年生の女子生徒たちは、7年生以降に学びを継続できない不安を抱えています。

悪化した状況の中でも懸命に学ぼうとする子どもたち

政権交代後、経済状況が悪化する中で、子どもたちは子ども図書館に訪れ、裁縫や手芸を学ぶことで、家族を経済的に支えたいと望んでいます。私は、アフガニスタンに平和が訪れ、新政権がすべての子どもたちに教育へのアクセスを提供することを期待しています。

Hot Topics

❶ モデル学校図書館の利用者が増加

2020年度建設の大規模女学校（小・中・高校）のモデル学校図書館では、当初1カ月380人だった利用者数が、3カ月目には1,428人に増加。小学校の生徒と教員に、図書館利用や本を読むことのメリットを解説した成果と考えられます。

❷ 新政権下で閉ざされた子どもたちの学び

政変以降、現政権は小学校1年生から6年生までの男女と、7年生から12年生の男子生徒のみを対象に学校を再開。また、女性教員が7年生から12年生の男子生徒を教えることを禁止しました。男女を問わずすべての生徒に悪影響を及ぼしています。

❸ 子ども図書館活動の役割

こども図書館に通う子どもたちからは、親が失業し、家族のためのパンを買うこともままならないという大変な状況も聞かれます。悪化した経済状況の中で、家族を経済的に支えるため、裁縫や手芸を学びたい子どもたちが増えています。

アフガニスタン事務所
職員代表

PROFILE

法学部と政治学部で経営と外交を学んだ後、教育省との開発プロジェクトを通じて、教員養成やノンフォーマル教育の分野で勤務する。

From
Nepal
ネパール事務所

復興が進むネパールでは、教育の質向上のための活動がスタートしています。事務所の設立初期から活動する職員のお話をお届けします。

若者や子どもたちが将来、地域に貢献するための学び

現在ネパールでは、教育の質の改善事業として、「コミュニティ図書館能力強化事業」と「先住民族地域における地域学習のカリキュラムの開発・普及事業」を行っています。「コミュニティ図書館能力強化事業」は、4つの郡で実施しており、その一つは、世界最高峰のエベレストと同じ郡にあります。さまざまな研修や学習サービスを通じて、地域住民、特に若者や女性たちが学びの機会やスキルを身につけ、生活の向上につながっています。私はネパールの極西部の出身のため、シャンティの活動を通して農村社会の課題を調査する機会を得たことは素晴らしい経験でした。また、ネパールの社会を良くするために各国の取り組みを知る良い機会にもなっています。

Hot Topics

❶ 栄養教育教材としての紙芝居を作成

栄養や正しい食生活について学ぶための紙芝居を作成しました。多くの生徒や教員は、紙芝居が栄養や健康的な食べ物の大切さを教えるのに役立っていると話しています。

❷ 支援対象校に図書コーナーを設置

支援対象校の各教室に図書コーナーを設置し、それぞれに100冊の絵本を配架しました。絵本は子どもたちにとても人気があります。

❸ 新しく導入された科目「地域学習」

ネパールで2017年に導入された「地域学習」という教科では、ラクシラン自治体と一緒に地域について学ぶ独自のカリキュラムと教科書と教員手引書を開発し、教員の研修を行いました。この事業は、ネパールの全国村長会からも優れた教育実践として表彰されました。

学んでいく力を身につける基礎レベルからの教育支援

シャンティの活動の特徴は、地域住民と密接に連携していることです。コミュニティ図書館には学習センターとして女性室やユース室、児童室などが整備され、研修や職業訓練を通して自身のキャリアを支えるスキルを得たり、モチベーションの向上につながったりしています。

ネパール事務所
アシスタント・コーディネーター
ナワール・キソール・バドゥ

PROFILE
さまざまな団体でのボランティア活動を経験後、有名企業の市場開発部門でインターンとして勤務。2016年5月、ネパール事務所の設立初期にプロジェクトアシスタントとして入職。

カンボジアの今と、これからの教育支援

カンボジア事務所開設30年目を迎え、「カンボジアと共に歩いた30年、今求められる教育支援とは」をテーマにオンラインイベントを開催しました。事務所開設当時の様子などをお伝えするとともに、変化を続けるカンボジアで今後必要とされる教育支援について考えました。（内容は2021年11月時点）

第1部 ひとつの学校から広がっていったシャンティの活動

手束：1991年にプノンペンに事務所を開設し、1993年にカンボジアの新政府ができたころ、図書館活動を開始しました。プノンペン市内や近郊の小学校や幼稚園、児童保護施設などを50カ所近く回り、郊外のダイアット小学校で絵本の読み聞かせを実践しました。子どもたちが全身全霊を傾けて聞き入る姿に1人の女性の先生が感動し「私に読み聞かせの方法を教えてください」と言ってくれました。

その後、このダイアット小学校に最初の図書館を建設し、多くの学校から先生が見学に来るようになり、地域を越えた図書館活動の拠点となりました。このようにして、カンボジアの図書館活動は一つの学校の一人の先生から始まり、カンボジアの先生方の手によって広がっていきました。

鈴木：これまで30年間カンボジアで活動を続けてきましたが、シャンティは何を残すことができたのでしょうか。

手束：30年前は教育省の職員から「必要ない」と言われた図書館活動が、教育省の政策にまでなりました。2017年には教育省も含め関係省庁の協力により、カンボジアに「国民読書の日」が制定されました。30年前はほぼなかった出版社が、今では100社以上あります。

出版した本が学校などに配られて、人々の宗教や文化の基礎を支えてきたと思いますが、まだまだ地方のへき地の学校には図書室がなく、本がない家庭も多くあります。学校はもちろん、家庭での読み聞かせが一般的になるまで、シャンティのカンボジアでの活動はまだまだ続くと思います。

鈴木：今後に向けて、何を大切にすべきでしょうか。

手束：それぞれの民族や地域のすばらしい文化を尊重し、人々から学ぶ姿勢が大事だと思います。これは日本国内でも同じですね。共に悩みながら意見を出し合って、同じ希望に向かって活動をつくっていくことが大事だと思います。

第2部 多様な価値観を強みに。現地主導の取り組みに期待

加瀬：シャンティのカンボジア事務所には20代から50代までの現地職員がいますが、世代によって考え方が違うということに気づきました。内戦期の過酷な影響を受けている世代と、復興期の国際支援のある中で育った若い世代との違いです。こういった考え方の違いは、多様性として強みにもなります。伝統文化と新しい価値観を取り込んだ支援を検討していきたいですね。

日本人の役割も、カンボジア人が持つ強みを引き出し、やりたいことをサポートする役割に変化してきています。運営主体を主役であるカンボジアの人たちに委ねていくことも、今後非常に大切だと思います。

パル：確かに世代間で考え方の違いがあると思います。この30年間、カンボジアの発展の多くは海外の支援によって形成されてきましたが、その結果学びの機会を得た人たちがカンボジアの教育省に入ってきています。これからは彼らのようなカンボジア人がオーナーシップを持ち、自国の未来をどう描くか期待しています。

徳川：価値観を変えることは本当に難しいですが、多様な価値観やアイデンティティーを踏まえた上で話し合い、前に進んでいくことが重要ですね。

社会は人から。人は学びから

徳川：教育には、まず一人ひとりの自己実現を可能にする力があると思います。カンボジアの方が教育を通じてスキルを身につけ、活躍している姿に教育の力を感じます。そして、産業発展を促進する力です。カンボジア政府の掲げる経済の多様化、技能集約型産業の転換には、スキルを持った人材を生むための基礎となる教育が必要だと思います。

最後に、異なる価値観や考えを共有し合って、信頼関係を構築しながら、一緒に課題解決を行う力です。教育によりコミュニケーション能力などを養うことが、異なる立場と課題解決をすることに結びつくと思います。

パル：経済面でも、人材育成が大きな柱と言われています。カンボジアが平和になって約20年がたちますが、内戦後のカンボジアには人が残されていませんでした。社会は人から成り立つと思いますし、いい社会を作るには人が重要です。

加瀬：活動地の皆さんとお話しする中で感じるのは、子どもたちの選択肢が少しずつ増えてきているということです。人々がより良い人生を歩むためには、選択肢が増えることが重要であり、そのために人々が多くのことを学び、実践できる環境が必要です。その根幹となるのが教育だと思います。

また、平和の構築と維持において、カンボジアの皆さんが自国の平和や安定を維持するために必要な議論をするきっかけとなるためにも、教育の果たす役割は大きいと考えています。教育の持つ力を、これからもしっかりと届けていきたいですね。

第1部登壇者プロフィール

手束耕治

シャンティ専門アドバイザー
1984年に入職し、2014年から現職。カンボジア宗教省仏教研究所顧問、NPOハート・オブ・ゴールド東南アジア事務所副所長を兼務。

鈴木晶子

広報・リレーションズ課 課長
2005年入職。緊急救援担当として国内外の災害支援に従事。2007年より4年間、カンボジア事務所駐在。2015年より現職。

第2部登壇者プロフィール

徳川詩織

独立行政法人国際協力機構（JICA）
カンボジア事務所 社会開発班長
2015年JICAに入構し、人間開発部基礎教育グループで教育分野プロジェクト・研修事業の形成・実施監理を行う。2017年6月に人事部人事課に異動し、2019年10月より現職。

チェア・パル

カンボジア開発人材研究所（CDRI）
研究員
神戸大学国際協力研究科で博士号取得後、同大学国際協力研究科および経済経営研究所研究員を務め、現職。2002年から10年間、カンボジアでシャンティの教育支援事業に従事。

加瀬 貴

カンボジア事務所 所長
国際協力NGOに就職し、2011年から青年海外協力隊としてカンボジアへ赴いた後、2013年5月にシャンティ入職。ラオス事務所所長を経て、2018年5月より現職。

ご視聴はこちらから

イベントの様子はYouTubeでご覧いただけます。

©Masao Seto

モン族

中国西南部やラオス、タイ、ミャンマー、ベトナムの山岳地域に暮らすモン族の人々。もともと中国南部で水田を耕す農耕民族でしたが、漢民族に追われ、東南アジアに逃れてきました。今では各地域に定住し、農業を主な仕事にしています。女性たちは、農作業や家事の合間に刺繍をします。彼女らの民族衣装には、色とりどりの刺繍やアップリケ、藍色のろうけつ染め（バティック）がほどこされます。特に襟元や袖には魔除けの意味を込め、念入りに刺繍します。モン族の女性は、6歳から刺繍の練習を始めるという習慣があります。幼いころから針と糸を持ち、祖先から代々伝わる刺繍の模様を受け継ぎながら、自身の花嫁衣裳をつくります。

スタッフの
おすすめ商品

ラオスのバティックポーチ

バティックは「ろうけつ染め」と呼ばれる染色方法。溶かした蝋を筆に塗り、生地に文様を描きます。藍の灰の汁を混ぜた染料に何度も浸しながら染め上げた生地を、お湯で煮込み、蝋が溶けると文様が浮かび上がります。

新商品やお買い得情報も更新中。クラフトエイド・オンラインストアはこちらから。

絵本を届ける運動

恐竜たちが、子どもの「自主性」を育む

この絵本は、「おやすみなさい」を言う前に、もっと遊んでいたい子どもたちの姿を、リアルでユーモラスな恐竜の姿で描いた、一風変わった「しつけ絵本」です。

「もうねなさい」と言われた恐竜たちは、知らんぷりしたり、泣きわめいてみたり、さまざまな手で抵抗します。

この話を読んだ子どもたちは、好き放題暴れる恐竜たちの姿を楽しみながらも、「こんなことしちゃダメだよ」などと客観的に見ることで、実際に自分が寝る時には、きちんと床につくようになるのだそうです。

大人が「こんな風にしたらダメだよね」と言ってしまうのは簡単ですが、実際に子どもたち自身が自発的に考え、学ぶことは、何より本人のためになります。

子どもたちの自主性を育むきっかけとして、この1冊をさらに多くの子どもたちに届けていきたいと思います。

『きょうりゅうたちのおやすみなさい』

作　：ジェイン・ヨーレン
絵　：マーク・ティーグ
訳　：なかがわ ちひろ
出版社：小峰書店

なんでこの絵本を選んだの？

シャンティが活動する地域でも人気のきょうりゅう。活動地からリクエストが届き、2022年はカンボジアとラオス向けに選びました。翻訳絵本をつくってくださる方を募集しています。

参加の
お申し込みは
こちらから

出版社紹介：
沖田駿平さん
株式会社 小峰書店

小峰書店は1947年より児童書専門の出版社として、絵本や読み物、学習系の書籍を刊行しております。

シャンティからのお知らせ

2021年度の絵本が旅立ちました

2021年度に集まった15,682冊の絵本が活動地へ向けて出発しました。2月9日にシャンティのスタッフのほか、企業ボランティアの方、曹洞宗総合研究センターの方々にもご協力いただき、32名で段ボール239箱分の絵本の運び出しを行いました。コロナ禍で絵本ボランティアの受け入れや対面でのイベントが開催されない中、オンラインでイベントを行うことで活動地の様子を伝えることができました。2022年は16,520冊を目標に受付を行っています。今年も「絵本を届ける運動」へのご協力をお願いいたします。

写真撮影：川畑嘉文

「絵本を届ける運動」のお申し込みはこちらから

事業紹介映像「共に生き、共に学ぶ」を制作しました

翻訳絵本のつくり方から活動地に届くまでの過程や、絵本を受け取った子どもたちの表情、読み聞かせを行う先生の気持ちなどシャンティの活動がよく分かる動画を日本語、英語ともに制作しました。ぜひご覧ください。

ご視聴はこちらから

絵本を届ける運動のロゴマークを作成しました

絵本がもたらす、芽吹く未来への可能性と、その元となる「種を届ける」＝「絵本を届ける」ということを表現しています。綿毛部分は開いた絵本を横から見た形をイメージしています。

絵本を届ける運動
Campaign to Deliver Picture Books

人事のお知らせ

●退職

小林 裕司　総務人事課 総務・IT担当（2021年12月31日付）
山口 恵里佳　事業サポート課 海外事業補佐（2021年12月31日付）
許 東音　アフガニスタン事務所　緊急人道支援担当（1月31日付）

●入職

萩原 宏子　ネパール事務所 所長代行（3月7日付）
喜納 昌貴　地球市民事業課 在留外国人支援・海外緊急人道支援担当（4月11日付）

●異動

山室 仁子　広報・リレーションズ課 支援者リレーションチーム チーフ →事業サポート課 チーフ 事業支援窓口（3月1日付）
岡本 和幸　専務理事 兼クラフトエイド課 課長→専務理事（4月1日付）
三宅 隆史　ネパール事務所 所長 →東京事務所 教育事業アドバイザー（4月1日付）

●昇格

嘉味田 倫慧　クラフトエイド課 課長補佐→クラフトエイド課 課長（4月1日付）

●休職期間の延長

（2022年4月30日まで休職とする）
八木澤 克昌　アジア地域ディレクター、常務理事

シャンティ 2022年6月号（通巻315号）｜2022年6月1日発行

発 行 人：若林恭英
発 行 所：公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233　FAX 03-5360-1220
WEB：www.sva.or.jp　E-Mail：info@sva.or.jp
編 集 人：山本英里、鈴木晶子
編集・制作：株式会社文化工房
イラスト：きよはらえみこ
印　　刷：株式会社サンエー印刷

ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C004858 www.fsc.org
リサイクル適性Ⓐ この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
VOC FREE
当会へのご寄付は、所得税、住民税、および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。
©Shanti Volunteer Association.
「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ（石油系溶剤0%）で印刷しています。

Shanti's Photo Log ファインダーをのぞいて

川畑 嘉文（フォトジャーナリスト）
Yoshifumi KAWABATA

ニューヨークの雑誌社勤務時代に9.11を経験し、記者職を捨て写真の道に進むことを決意。2002年、会社を退職しタリバン政権崩壊後のアフガニスタンを訪れ取材を行った。2005年フリーランスのフォトジャーナリストとなり、世界中の難民キャンプや貧困地域、自然災害の被災地で取材を行い、雑誌や新聞などに写真と原稿を寄稿している。

黄昏時のレイケイコー村。同じ形の家が並ぶ。

平和の象徴レイケイコー村

「宗教や民族に囚われず協力して生きる。それがレイケイコー村の理念です」。2020年2月、この地を訪れた際、村のリーダーたちは話しました。

2015年に作られたばかりのこの村は国内避難民や帰還難民たちの受け入れ地としても期待され、新しい住居の建設が進んでいました。通りでは、無邪気に遊ぶ子どもたちの姿があり、なんとも長閑です。職を持たない村人のために、農業を根付かせようと少し離れた丘陵地帯には種々の苗が植えられていました。これらが成長するころにはきっと村も賑わいをみせていたことでしょう。

そんな村が2021年12月戦闘状態に陥り、2022年1月にミャンマー国軍の手に落ちました。多くの人々がまた難民となってしまったのです。あの子どもたちが無事に避難できたことを祈るばかりです。

上：サッカーをして遊ぶ小僧（しょうそう）たち。
下：夕方、家路につく子どもたち。村には高校までの教育機関がある。